

(令和元年10月6日)

赤松小三郎研究会 講演会 のご報告

今回で第7回を迎える赤松小三郎講演会は、日比谷図書文化館（千代田区）で過去最多の174名が参加のもと、講師に岩下哲典東洋大学教授をお迎えして開催された。

日時 : 令和元年9月28日（土）14:00～16:30

場所 : 日比谷図書文化館 地下コンベンションホール

出席者 : 174名（同窓生52名、一般122名）

◎演題：『赤松小三郎と坂本龍馬・中浜万次郎～その国家構想と暗殺をめぐる』

◎講師：岩下哲典 東洋大学教授

<配布資料>

1. 本講演のレジメ～岩下哲典教授作成
2. 赤松小三郎 略年譜
3. 「赤松小三郎研究会」この1年の活動概要
4. 「赤松小三郎研究会」入会のご案内

<内容>

- 赤松小三郎研究会 会長 滝澤進より挨拶
- 同研究会 事務局長 小山平六より講師 岩下哲典教授の紹介
- 同研究会 事務局 荻原貴が司会

○講演要旨

はじめに

国家とは、歴史とは、なにか

- ・領土・領民・主権を持つのが国家であるが、近世から近代（幕末維新）では対外観（外国とどう向き合うか）が非常に重要視されてくる。
- ・通常武士や民衆は国家を意識しないが海外に出た時（漂流民）や外国船と向き合った時に国家を意識するようになった。
- ・国民にとって国家は重要だが余り偏狭になってはいけない。バランス感覚が重要で、歴史とはバランス感覚を磨くもので偏狭にならないための基礎教養である。また、暗記科目ではなく、考える営為である。

1. 幕末日本の国家構想のきっかけは、ペリー来航？

1852年ペリー来航予告情報（3つが重要：①「オランダ別段風説書」、②「バタフィア総督公文書」、③「日蘭通商条約草案」）を、オランダがペリー来航の1年前に長崎奉行を通じて幕府側に伝えており、幕府はそれを基に事前に議論をして対応を検討していた。非常に重要なポイントである。

- ・よって、狂歌「泰平の眠りを覚ます上喜撰 たった四はいで夜も寝られず」は実態に合ったものとは言えないのではないか（眠り→眠け、という説がある）、最近では教科書にも載っていない。
- ・オランダとしては、情報提供することによってアメリカより先に日本と通商条約を結ぶ狙いがあったが、実現しなかった。

ペリー来航直前の黒田対外建白書の内容（徳川林政史研究所所蔵）

- ・外様大名である福岡藩主黒田斉溥（なりひろ）が「オランダ別段風説書」を読んで危機感を覚えて幕府に建白したもので、ペリー来航前では唯一の建白書。更に背景としては、①人的資質～蘭癖 ②藩の事情～長崎警護と蘭学 ③阿部正弘（老中首座）の政局運営～外様大名を当てにしていた ④有識大名の支援、が挙げられる。
- ・内容：御三家の幕政参与（制度改革）、海軍創設（万次郎に任せる→身分制打破・構造改革）、雄藩大名（島津斉彬・徳川義勝、等）の支援（連合国家構想の萌芽）
- ・具体的提言：①「土州漂流人」（万次郎を想定）の召喚 ②有識大名への情報公開と御三家の幕政参与 ③幕府の対外方針の早期決定

黒田の建白書、結果と意義

- ・ペリー来航後の阿部正弘の近代化施策のもとになった、またはその施策の後押しとなった。
 - ・実現したこと：①御三家への情報公開（例えば、ペリー来航前に「オランダ別段風説書」） ②徳川斉昭、海防参与に任命（嘉永5年12月） ③諸大名に情報公開し意見諮問 ④「中浜万次郎」、江戸出府、⑤日米和親条約締結 ⑥近代化（長崎海軍伝習所、等）への道筋、等々
- ⇒日本の近代化のきっかけはペリー来航では無くて、実はその1年前のペリー来航予告情報から始まった、と考えるべき。
- ・1853年ペリー来航後は、800通以上の上申書が幕府に提出された。内訳は大名から二百数十通、残りは旗本などからであった。主な意見書はアヘン戦争に言及、どのような国家であるべきかという国家観のせめぎ合いでまさに建白戦争。（旗本らの上申書は、一部をのぞきまだほとんど分析が済んでいない）

その他

- ・19世紀初頭のロシア使節の南下に対して、特にレザーノフ（ロシア・アメリカン・カン

パニー極東総支配人兼ロシア皇帝の侍従長)に幕府が通商拒否をしたことで国境問題で揉めて、ロシア脅威論が生じた。レザーノフ来航をきっかけに幕府内に開国論が生じた。このことは後の安政の五か国条約を結ぶ際の経験になった。

- ・日蘭通商条約草案を幕府が分析した結果、オランダは幕府の外交を指導することを狙っていた(=幕府の外交の自主的な選択肢が狭まるものである)ことが判り、結局条約締結に至らなかったと思われる。これにより、西欧では条約を結ぶシステムがあることを知り、この経験を基に後にアメリカを皮切りに西欧諸国と条約を結ぶことになる。

(以下、その後の流れ～この報告書では当日の説明を一部割愛しています)

- ・1854年日米和親条約締結
- ・1858年日米通商条約締結
- ・1861年ポサドニック号事件(歴史の教科書には載っていないが歴史上非常に重要な事件):ロシア軍艦が対馬を占領しようとして半年間居座った。最後はイギリス海軍の助けを借りてようやく追い返すことができたが、これを機に攘夷運動が高まった。攘夷運動と幕政改革は表裏一体だった。
- ・1862年島津久光の卒兵上京、寺田屋事件→幕政改革要求、政事総裁の松平春嶽、将軍後見のつ橋慶喜、京都守護職の松平容保
- ・1863年浪士組・新選組、8・18クーデター
- ・1864年京都見廻組、禁門の変、第一次長州戦争
- ・1865年第二次長州戦争
- ・1866年薩長同盟
- ・1867年赤松小三郎建白書、薩土盟約、赤松小三郎暗殺、「大政奉還」、坂本龍馬暗殺、薩長芸三藩盟約、王政復古のクーデター
- ・1868年鳥羽伏見の戦い、尾張藩の勤王誘引、駿府会談→「江戸無血開城」、東西統一国家構想

2. 赤松小三郎の国家構想

資料1「御国事御改正之数件奉申上候口上書」(1867年、慶応三年五月)

- ・原文は、関良基教授 著「赤松小三郎ともう一つの明治維新」(作品社)を参照願いたい。
- ・大政奉還前の慶応3年(1867年)5月に赤松が国家構想を出したとき、多くの人が赤松はすごい人だと理解した。

<赤松建白書の骨子(要約)> (下線は報告者が記しました)

第一条: 議会・政治制度

- ・朝廷・幕府が一体となり諸藩が合同した国体を樹立すべきである。
- ・そのためには朝廷の権限を拡大し、徳を備え、公平に国事を議論し、全国に命令が行き

届くようにして、違反者が無いようにする局を開設することである。天子を助ける宰相は、大君（将軍）、堂上方、諸侯方、旗本のうちから、道理に明るく、実務に通じ、海外の事情を熟知している6人を選んで、1人は大閣老、1人は錢貨出納、1人は外交、1人は海陸軍事、1人は刑法、1人は徴税を担当する。それ以下の諸役人も門閥に関係なく選抜して天子に仕える。これが朝廷である。

- ・それとは別に上下議政局を設け、下局は諸国から数人を選挙で選び、全部で130人、その3分の1は在京する。上局は、堂上、諸侯、旗本から選挙で30人を選び、この上下両局ですべての国事を議決し、朝廷に建白し、その許可を受け、全国に命令する。ただし、朝廷が許可しなかった場合は、議政局に再審議して公正であるとされれば、全国に命じることができる。
- ・議政局の選挙では、門閥貴賤に関係なく、道理をわきまえ、私心の無い、人望のある人を公正に選ぶこと。
- ・また、これまでの失政を改め、万国に通用する法の精神を用いて、朝廷役人の人事、外交、財政、富国強兵、人材教育等の法律を制定する。これが国是の基本である。

第二条：人材教育・大小学校・兵学校、第三条：民生・減税、第四条：通貨平均、人口、物資・通貨の安定、第五条：軍事：高性能武器、少人員、有事は男女とも兵役、第六条：産業振興、機械輸入・御雇外国人、第七条：富国強兵←体力向上、家畜繁殖と肉食奨励

<赤松建白書についての解説>

- ・特に第一条がすごくてびっくりするような内容～門閥に関係なくというところがすごい、議政局という議会を非常に重視している、議会が2度決議すれば法律になるという考え方であり当時としては最も民主的な考え方。
- ・軍事について、意味深いことを言っている。
- ・小三郎が目指したのは小さい政府。
- ・有事には、男女とも兵役の義務を課しているのは、興味深い。
- ・日本人は、体格が外国人に比べて劣っており、肉食の奨励は非常に意味がある。[諏訪大社の鹿食免（かじきめん）の紹介あり]

3. 坂本龍馬の国家構想.

資料2「慶応三年十月三十一日付後藤象二郎宛坂本龍馬書簡」

- ・この書簡は、龍馬が山内容堂の手紙を福井の松平春嶽へ届けて春嶽の手紙を持ち帰る中で、福井藩大目付村田巳三郎らと議論した様子などを後藤象二郎に報告したもの（十月十四日「大政奉還」の半月後、十一月十五日龍馬暗殺の半月前）
- ・慶喜は大政奉還したのだから将軍職も返上しなければ反正（反省）したことにならない。
- ・新国家の財政担当は三岡八郎（後の由利公正）の他にいない。

資料3 「新政府綱領八策」(1867年 慶応三年十一月)

- ・八項目あるが、「第一義、第二義、・・・」とあるので、「新政府綱領八義」と呼ぶべきかもしれない
- ・項目のみでざっくりした内容～人材登用、制度改革、外交、憲法制定、議会、軍事、朝廷守護、貿易・財政
- ・第八義に、盟主は「〇〇〇公」という記載がある。龍馬は慶喜を含めたオールジャパンでの新国家を思い描いていた。

資料4 「慶応三年十一月十日付中根雪江宛坂本龍馬書簡」

- ・龍馬が暗殺される5日前、龍馬が福井藩中根雪江(春嶽の側近)に宛てた書簡
- ・三岡八郎の上京が一日遅れれば遅れるだけ新国家の会計が一日先になってしまう。
- ・中根雪江に永井玄蕃(尚志・幕府若年寄)と一緒に会いに行つて欲しい、と言っている。→龍馬は永井、中根、龍馬で同盟のようなものを結んで薩長と渡り合いながら新国家を目指していたのではないか。
- ・このころ龍馬は永井と考え方が一致している、と言っている。覇権を狙う薩長としては龍馬の動きが目障りとなっていた。

4. 赤松構想と坂本構想の比較

- ・赤松の議会、政治制度の構想は、国民国家の構想であり、トータルで国家を具体的に構想しており、赤松ならではのもの。突出しており、出色。
- ・赤松の構想は、龍馬の志向していたものをより精緻にして文章化したもの。
- ・龍馬(海舟)～ 行動的・活動家・政治家、まとまった業績が少ない、行動で示す。
赤松 ～ 学者、グランドデザインを描ける、多くの業績を残す。
- ・今のところ、赤松と龍馬の直接の接点は見いだせないが、龍馬は赤松の構想を参考にして実現しようとして、奔走した可能性もある。
- ・赤松が生きていれば、明治の藩閥の強権的な政治とは違ったものになったかもしれない(国際情勢もあるので難しい面もあるが)。

2人の暗殺をどのように考えるか バランス感覚で

- ・赤松暗殺の下手人は薩摩藩中村半次郎(桐野利秋)～赤松スパイ説(幕府会津藩)、赤松は大きな存在だった(敵に回すと軍事面でやっかい)、いずれにしてもどんな理由があろうと暗殺は正当化されるものではない。
- ・龍馬の暗殺の下手人は幕府見廻組だが、薩摩黒幕説がある。その背景には、「大政奉還」

後、赤松構想がより現実味を帯び始めたが、これは薩摩の過激派にとっては好ましくなかったことがある。タッチの差で龍馬は見廻組によって暗殺されたので薩摩は直接手を下さずにすんだ、とも言える。

- ・龍馬の死後、パイプ役がいなくなり、慶喜・旧幕府を取り込んだ「オールジャパン」は困難になった。

その後・・・王政復古（慶喜排除）→鳥羽伏見戦争→尾張藩の勤王誘因→江戸無血開城→奥羽越列藩同盟→長岡戦争→会津戦争・庄内戦争→函館戦争、明治10年西南戦争で新政府勝利により軍事国家化した、と言える。軍事国家になった瞬間、侵略国家たらざるを得ない。その意味では徳川時代は稀有であった。幕末まで外圧が極めて弱かったことが大きな要因であろう。

中浜万次郎（1828～1898）

- ・万次郎は、漁民の出だが、軍艦操練所教授方、開成学校二等教授などを務め、英語や西洋文化の伝授に役割を果たし、次のようなわが国の近代化を支えた人々に大きな影響を与えた。

坂本龍馬、後藤象二郎、島津斉彬、徳川慶勝、大槻盤溪、江川英龍、阿部正弘、佐久間象山、吉田松陰、水戸斉昭、一橋慶喜、小松帯刀、勝海舟、木村芥舟、福沢諭吉、福地源一郎、西周、新島襄、榎本武揚、大鳥圭介など

- ・赤松の建白書の議会・政治制度についての構想は、議会制度とアメリカ大統領の関係を表わしている部分があり、万次郎が一定程度影響を与えた可能性がある。

最後に

◎幕末の西洋事情に通じた人物を考える上で、赤松と中浜は欠かすことができない人になりつつあるし、坂本は赤松の構想を実現しようとした可能性がある。

◎本人の研究とは別に、周辺の人物を探っていく中で分かってくることもあるので、多面的な歴史像を探っていくことが重要。

参考文献 岩下哲典「幕末維新史と城郭・城下町・武士」『城下町と日本人の心性』岩田書院、2016」同「幕末日本における秩序創出の困難さ－坂本龍馬・赤松小三郎の新国家・新秩序構想と暗殺をめぐって」『東アジアの秩序を考える』春風社、2017」関良基『赤松小三郎ともう一つの明治維新』作品社、2016」宮地佐一郎『龍馬の手紙』講談社学術文庫、2003」なお、赤松に関しては、青山忠正「慶応三年一二月九日の政変」明治維新史学会編『講座明治維新』二、幕末政治と社会運動、有志舎、2011、赤松小三郎顕彰会編・刊『重訂赤松小三郎実録』2013、竹内力雄『山本覚馬建白（管見）』（私家版）2014、宮地正人『地域の視座から通史を撃て！』校倉書房、2016、柴崎新一

『赤松小三郎先生 現代誤訳版』赤松小三郎顕彰会、2016 なども参照。また、上田藩については、青木歳幸『シリーズ藩物語 上田藩』現代書館、2011 参照。

岩下哲典（いわした・てつのり）氏〔略歴〕1962 年年長野県塩尻市北小野（「たのめの里」）に生まれる。1994 年 青山学院大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得。1997 年 明海大学経済学部専任講師（のち助教授）。2001 年博士（青山学院大学、歴史学）。2004 年同大学ホスピタリティ・ツーリズム学部開設実施委員。2005 年同大学同学部教授。2016 年東洋大学文学部史学科（大学院文学研究科史学専攻博士後期課程論文指導担当）教授。現在に至る。〔職歴等〕財団法人徳川黎明会総務部学芸員、（古河市）鷹見家資料学術調査団調査員、東京都埋蔵文化財センター丸の内分室（土佐藩・阿波藩上屋敷跡遺跡発掘）文献調査員、新修名古屋市史第三部会執筆・調査員、国立歴史民俗博物館客員助教授、津山洋学資料館展示構想策定委員、浦安市文化財審議会副委員長、浦安商工会議所地域ブランド開発プロジェクト委員、浦安市社会福祉協議会理事、国際日本文化研究センター共同研究員、うらやす市民大学コーディネーター兼講師、浦安市読書会協議会「歴史の会」講師、中浜万次郎の会顧問など歴任。他に青山学院大学・聖徳大学・早稲田大学・東京女子大学等の非常勤講師を歴任。現在、徳川林政史研究所特任研究員、都留文科大学非常勤講師、洋学史研究会副会長。〔近著単行本、除論文等〕2018 年『江戸無血開城』（吉川弘文館）、『普及版 幕末日本の情報活動』（雄山閣）。2017 年『幕末維新の古文書』（監修、柏書房）『病とむきあう江戸時代』（北樹出版）『津山藩』（現代書館）、『地域から考える世界史』（勉誠出版）、『東アジアの秩序を考える』（春風社）。2016 年『城下町と日本人の心性』（共編著、岩田書院）。2014 年『解説 大槻磐溪編「金海奇観」と一九世紀の日本』（単著）雄松堂書店、『東アジアのボーダーを考える』（共編著、右文書院）。2012 年『高邁なる幕臣 高橋泥舟』（編著、教育評論社）。2011 年『レンズが撮えた幕末明治日本紀行』（山川出版社）、『日本のインテリジェンス』（右文書院）、『江戸時代来日外国人人名辞典』（単編、東京堂出版）、『江戸将軍が見た地球』（メディアファクトリー新書）、『レンズが撮えた幕末の日本』（山川出版社、塚越俊志氏と共編）。2010 年『坂本龍馬の世界認識』（藤原書店、小美濃清明氏と共編）。2008 年『[改訂増補版]幕末日本の情報活動』（雄山閣出版）。2006 年『予告されていたペリー来航と幕末情報戦争』（洋泉社）、『江戸の海外情報ネットワーク』（吉川弘文館）。2000 年『徳川慶喜－その人と時代』（岩田書院、編著）、『江戸情報論』（北樹出版）、『幕末日本の情報活動』（雄山閣出版）。1999 年『江戸のナポレオン伝説』（中央公論新社）。1998 年『権力者と江戸のくすり』（北樹出版）。1997 年『近世日本の海外情報』（岩田書院、真栄平房昭氏と共編）。

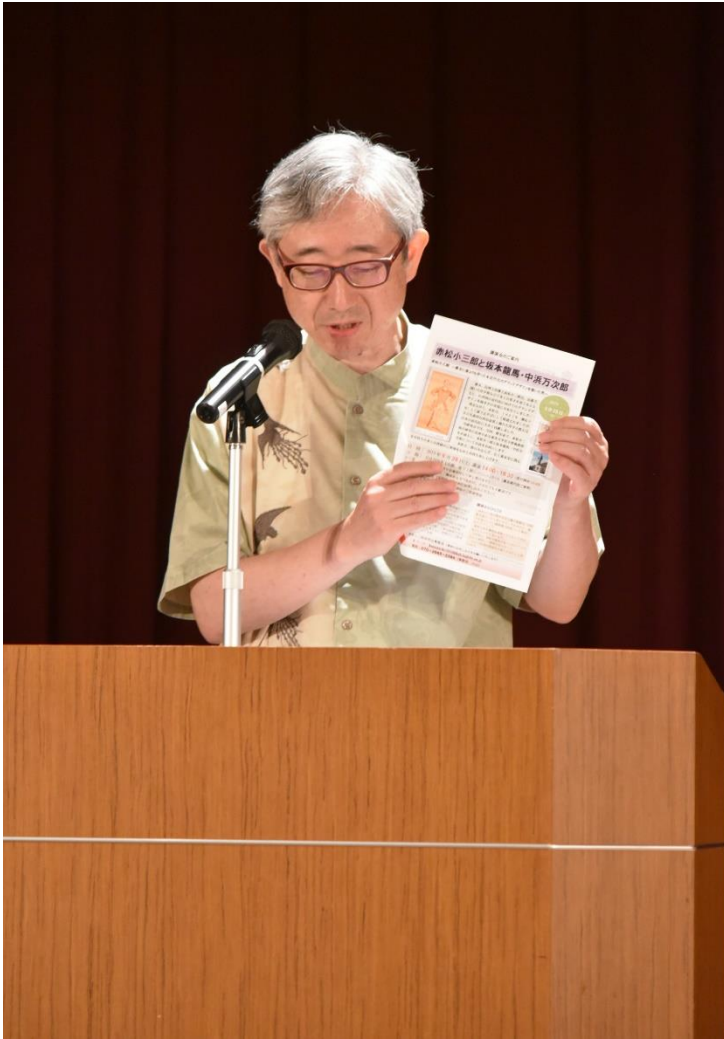
以上

（報告者）

赤松小三郎研究会事務局

荻原 貴（79期）

次ページに写真 2 葉を掲載



講演される岩下哲典先生



講演聴講風景